

藤沢ゆかりの人物を語る(2)

## 和田 義盛

# 横田 栄司

(俳優)



【俳優への道のり】  
宇都学芸員…本日はお忙しい中ありがとうございます。さっそくなのですが、横田さんが俳優を目指されたきっかけを教えてください。

横田栄司…よく聞かれるのですが、これだというものがなくて。大きく言うと、一緒に暮らしていた祖父と父の影響があります。祖父が時代劇が好きでした。「遠山の金さん」とか「水戸黄門」とか。そして父は洋画が大好きでした。そのため、幼いころからテレビを通して映画やドラマを見る機会が多い家庭に育ち、それが下地になっていると感じます。

とにかくおじいちゃん子で、祖父と一緒にテレビを見るのが好きでした。父とはNHKでやっていた「刑事コロンボ」を見たり、日曜洋画劇場をよく見ました。そういう洋画に触れ、映像作品に興味を持ったというのが、子どものころの原体験だったと思います。

宇都…そうだったんですね。

横田…その後、成長して高校生になったときに、進学した高校が文化祭の盛んな学校でした。高校1年生の時は、クラス単位で教室演劇をやりました。自分たちで脚本を書いたり、演出したり、小道具を作ったりして。アドリブ満載で担任の先生とか数学の先生とかも皮肉るような物真似が挟んであり、同級生を見ると大笑いするような教室演劇でした。

2年生の時は、クラスでVHSのビデオカメラを使ってクラスメイトが出演者で、僕が監督的なことをやって、ビデオ映画作品を作って出品しました。

3年生の時は、ミュージカルをやりました。「オペラ座の怪人」を音楽の得意な子が楽譜を耳コピして。今やったら問題になるかもしれませんが

が、みんなで歌って踊ってお芝居してみたいな感じですよ。それも振り返ってみるとなんですけど、心に大きいフラグになったというか、演劇表現の楽しさを知りました。お客さんがすごく喜んでくれましたから。教室から出て保護者や在校生の列が校門の外まで延びるくらいでした。

後々、その高校の文化祭が有名になりました。いろいろなところから取材が来るくらいになりました。外苑前にある都立青山高校なのですが、普通の都立高校ですが、文化祭が盛んだった高校に入ったというのが役者になる大きなきっかけの一つだったと思います。高校を出てからもその思い出が忘れられませんでした。その時の熱狂というか、心の喜びとか。お客さんの拍手だったり。それは今にも通じる、カーテンコールのお客さんの嬉しそうな顔だったりとか。テレビドラマでも、反応だとか、感想を聞かせて貰えたり。それが今にもつながっています。高校の時の友達とか、その保護者の方からは「横田君はいつまでも文化祭やってるね」って（笑）。そんなふうに言われるくらい、高校時代の文化祭を引きずっている部分は大きいと思います。

**宇都**：それで桐朋学園という演劇で有名な学校に進まれたのですね。

**横田**：そうですね。僕も人生の中で映画が大好きになりましたし、高校時代の仲間も映画をたくさん見ている感じだったので、そういう友達と競うように映画を見て、感想を言い合ったりして。

いつしか、映画に出るにはどうすればいいのだろうみたいなことを考えるようになりました。邦画のパンフレットなどを読み漁って、俳優になつた人たちはどういう経緯をたどっているのだろうって調べていくうちに、俳優座ですとか、文学座ですとか、僕の好きな俳優さんには、いわゆる日本の新劇といわれる出身の俳優さんたちが多かったんです。

例えば原田芳雄さんであったり、松田優作さんや、山崎努さんなど、古き良き時代のお兄さんやおじさんというか、本質的な雰囲気のおいにする多くの俳優さんが、新劇を経由しているということに気づき、その俳優座に行くために桐朋学園に入りました。

俳優座を作った千田是也さんが作った学校でして、桐朋学園を経由すると飛び級で俳優座の研修生になれるのです。そういったこともあり、目指しました。

### 【和田義盛という人物について】

**宇都**：今回、横田さんは和田義盛の役を演じられていますが、世間一般では少しマニアックな人物であるかと思えます。役作りで和田義盛という人物をお調べになられた時のイメージと演じられている現在ではイメージが変わったことはありますか。

**横田**：和田義盛についてはキャスティングされてから勉強を始めた感じでした。源頼朝と北条政子、北条時政など歴史の授業で聞いたことある人物くらいしか分からなかったです。

イメージとしてはそこまで大きく変わってはいませんが、最初自分の中で描いたイメージが加速しています。変わったのでなくて、例えば、風船に空気を入れて大きくなっていくような感じですよ。直情径行の部分はもっと直情径行に。感情の幅がどんどん膨らんでいっているような感じですかね。それはもちろん三谷さんが書かれている脚本がそうになっているからだと思います。

**宇都**：治承4年(1180)に源頼朝が旗揚げをしたときに和田義盛は三十三歳、そして和田合戦で討ち死にした時は六十六歳です。演じた際に

年齢ごとに言葉遣いや立ち振る舞いなどを変えていったことはありましたか。

**横田**…まず、見た目を少しずつ老けさせていくということはありません。最初はひげも黒々していましたが、今は少しずつ白くなっています。和田合戦の頃は六十代後半なので、もっと白くすると思います。しゃべり方に関してはそんなに変わっていませんが、多少ゆっくりと、なるべく低めの声で話すように意識しています。というのも最初のころは、あえて少し甲高い声でやっていたので。だから声のトーンを下げるとかは少しずつやっています。衣装も若いころは明るい色だったのが、だんだん歳がいくにつれて色が深い色になっていきます。

**宇都**…旗揚げするときは、まだ、麻のよれつてしたような服がだんだんと立派な服になっていくのも面白いなと思いました。和田義盛を演じられて反響などはありましたか。

**横田**…一番大きかった反響は頼朝に送った書状（和田義盛が自分の戦功を頼朝に伝えた書状。拙い自画像が挿入されている。編集者注）ですかね。大河ドラマ館に飾ってあるもので「あの絵よかったよ」などとと言われるのですが、あれ僕が描いたのではないので（笑）。でも三谷さんが「あれは横田さんの和田義盛がいかに描きそうな絵だから横田さんも喜んでいいですよ」とは言われました。

後はスポーツ新聞の取材なども受け、「ヒゲかわ武者」というタイトルをつけてくださって、ありがたいやら、恥ずかしいやら、嬉しいような、照れくさいような、なんとも言えないありがたい気持ちです。

**宇都**…ドラマの中での唯一の癒しキャラというようにも評されているようですが。

**横田**…三谷さんも「まさかの癒しキャラですね」とおっしゃっていたのですが、僕も「まさかの」なのですけど、三谷さんもそうなのだというのが驚きました。

**宇都**…当初はその設定は予定されていなかったのでしょうかね。

**横田**…どうなのですかね（笑）。「まさかの」ってあなたが書いたのですよとは思いますが（笑）。嬉し恥ずかしといった感じですよ。

### 【藤沢市のイメージ】

**宇都**…先ほども少しお話をさせていただきましたが、和田義盛と藤沢市域で活躍した大庭氏が和田合戦の結果、歴史の表舞台からは姿を消します。そういう意味では藤沢市と和田義盛はゆかりがあり、取材をさせていただいておりますが、横田さん自身、藤沢市に來られたことはありませんか。

**横田**…もちろん江の島はあります。一番の思い出は、高校の同級生と初日の出を見に行ったことでしょうか。みんなで楽しんだ思い出があります。

**宇都**…ちなみに藤沢市にはどのようなイメージをお持ちでしょうか。

**横田**…江の島とそれから湘南、海が広がっているイメージですね。あと

は小田急線が走っている街というイメージもあります。逆にお聞きしたいのですが、他にどのようなものがありますか。

**宇都**：江の島とか鶴沼や片瀬といった海側のイメージが強いのは周知の事実だと思います。でも実は海から離れた内陸部にも特産品や歴史など様々な魅力がある街です。

**横田**：そうなのですね。今度、内陸部も訪ねてみたいと思います。

**宇都**：ぜひお越しくください。個人的なお勧めは大庭城跡です。とある城館の研究者が「神奈川には600近くのお城があるけれど、大庭城跡は5本の指に入るほど重要なお城である」との評価も得ている隠れた名所です。令和3年12月1日に藤沢市指定史跡になりましたので、ぜひとも盛り上げていきたいと考えています。

**横田**：藤沢は何が美味しいのですか。

**宇都**：生シラスなど海の幸が有名です。ちなみに個人的にはシラス丼がお勧めです。あとは内陸ですと、トマトやブドウやブタが有名ですね。

**横田**：そうですね。何て言ったって江の島ですものね。ぜひ藤沢でそれらを食べてみたいと思います。

### 【俳優として大切にしていること】

**宇都**：最後になりますが、現在横田さんは俳優として大変ご活躍されていますが、役柄を演じるにあたって大切にされていることは

ありますか。

**横田**：作品によつて大切にしていることは変わりますが、一貫して変わらないのは、作者の方が書いたことを演じるということです。つまり、作者の意図に沿って忠実に再現するという基本のもとに、そこから自分のアイデアであったり、オリジナリティであったり、個性を少しずつ忍ばせながらも、作者が書いたことをやるということが俳優の一番大事な仕事だと思っています。

あとはその作品によつて、例えばドラマであったら相手の役者さんが「そこまで言うのだったら、こうやって言い返そう」とか撮影時の瞬発力が大事だと思っています。舞台でしたら、再現性の高さといえますか、毎日お客さんが入れ替わる中で僕たちは同じレベルでお芝居をキープしなければならぬという粘り腰的なキープ力も必要だと思っていますし、映像作品や舞台などによつて大切にしていることは変わりますが、一貫して変わらないのは先ほど申し上げたことですかね。

**宇都**：本日はお忙しい中ありがとうございます。これからもご活躍をお祈りいたします。

**横田**：ありがとうございます。

語り手 横田栄司

聞き手 宇都洋平(藤沢市郷土歴史課 学芸員)

編集 串田 匠(藤沢市郷土歴史課 職員)

協力 川口俊介(NHK)

NHK

文学座